

## [報告]

### 高等学校におけるロシア語教育の現場 —立教高等学校での経験から—

菅野開史朗

#### 〈はじめに〉

外国語の面白さを伝え、ひいては外国に対する興味を引き出すことがいかに重要であり、また一面困難であるかは言うまでもない。昨今英語教育に関してなされている議論が妥当であるかはここでは問わないが、英語以外の外国語教育のあり方となればなおさら議論が立ち遅れているのが現状である。外国語に限らず、高校時代に受けた知的刺激が、その後の人生にいかにか大きな影響を及ぼすかは、我々も経験してきたところであろう。その意味では重大な責務を担っていることになる。

高等学校における外国語教育となると、大学等に比べかなり強制力のあるものになる。私立立教高等学校（2000年4月に立教新座高等学校と改称予定）に関して言えば、第二外国語はもちろん選択科目ではあるけれども、その成績も当然大学推薦の資料にされる。立大推薦を目指す生徒は試験を気にして必死になって勉強するが、早くに選から漏れてしまうことが確実な生徒は多くが一般大学入試の受験勉強に専念するので、関係のない科目を「捨てて」いる、と言った問題もある（本校ではどんなに成績が悪くとも「赤点」や留年などはないため）。立大推薦の資格が得られるのは約7割（1999年度現在）で、これは付属校としては狭き門といえよう。

ロシア語を教えている学校にはいわゆる「教育困難校」などはないと思われ、昨今社会問題として取り上げられるような、授業が成立しなくなるような深刻な事態は起きないし、生徒の知的好奇心もある程度は期待できるのである。とはいえロシア語を選択し学ぶこと自体には明白な動機はまずない。1998年度の生徒の中には、小学校時代に激動期のモスクワに住み、興味を持ったという者がいた（ちなみに成績も抜群によかった）が、時代を反映しているよい例といえよう。またロシアの音楽など、文化に興味を持ってロシア語を選択する者も若干いる。

以下に、まだ1年半（1999年度末現在）と短期間ながら、筆者の立教での経験をもとに、高等学校におけるロシア語教育の現状と課題を述べることにする。

### <カリキュラム>

3年生のみが履修するC選択、略してC選の科目のうち、第二外国語はフランス、ドイツ、スペイン、イタリア、ロシア、中国、朝鮮、アラビアの各言語が開設されており、いずれも週1回、時間割は1・2限すなわち午前8時40分より50分間、その後10分休みをおいて9時40分より50分の計1時間40分と決まっており、曜日は講師の希望で選ぶことができる。

筆者の知る限りでは、第二外国語の講師は筆者と同年代の若い世代の人が多く、フランス語、朝鮮語とアラビア語（同一講師）、イタリア語がそうである。ロシア語は1997年に開設されたばかりとのことで、前任者の三好俊介氏（現九州大学助手）が初代講師を勤めた。したがって本校におけるロシア語教育の基礎づくりは三好氏の尽力によるところが大きい。

さて授業回数だが、週1回では1週間たつうちに生徒が忘れてしまう、という問題はある。そのうえ行事などが頻繁にあり、1回休みがあれば2週間あいてしまう。こういう場合は宿題を出すなり、小テストを予告して実施するなど忘れさせない工夫が必要である。私立なので休暇は長く（秋休みもある）、夏休みに忘れてしまったものを取り戻させるのはお互い骨が折れる。またそのうえ3年生しか履修しないことから、11月末に学年末試験を実施し、12月初頭には立大推薦の資料となる成績が出てしまうので、授業回数は筆者の記憶ではI期（一学期）が10回、II期（二学期）が8回と、かなり少ない。その後1月に1-2回授業があるのみである。このときには普段どおりの授業をしても身が入らないので、ロシアを紹介するためビデオを見せたり音楽を聴かせたりということになる。これはI・II期にも1度か2度息抜きに行ってもよいと思う。生徒の関心ははっきりしなければ（その可能性が高い）、講師が自分の好みで選んでかまわない。余談だが筆者は個人的に「デルス・ウザーラ」が気に入っている。黒澤明がソ連で作ったということで興味を持つ生徒もいるし、異文化接触や文明論的な面で考えさせることも多かろう。デルス・ウザーラのロシア語は、文法的には初学者でも間違いがわかるほどひどいものだが、文法が間違っているものでも通じるものだ、などという話を講師がしてもいいのかどうかはともかく、生徒と話題にできる内容のものは悪くないと思っている。98年度には興味を持った生徒に原作の本を貸したこともあるほど、関心が高かった。

### <生徒数と人気>

第二外国語は大学におけるそれと同様、年度によって人気のある言語とない言語にはっきり分かれる傾向があって、昨今の時勢のためか、立教でもロシア語はご多分に漏れず人

気があるとは言えない。ただ立教に関しては、年度によって授業が他の第二外国語と重なっているかどうかで履修者数が大きく左右され、必ずしも人気とは関係ない。1997年度の履修者は前任者によれば10数名であったといい、98年度は（筆者は9月より引き継いでいる）32名、そして99年度は2名である。この極端な人数の変化は、98年度は他の第二言語の授業と重なっていなかったのに対し、99年度は中国語、イタリア語という人気語学科目と重なったのが災い（幸い？）したことによる。

4月はじめに履修ガイダンスが行われ、いくつかの教室で同時に開かれる中から生徒たちが興味のある科目のガイダンスを聞いて回るのだが、99年度に関しては、そのときにロシア語のガイダンスに来る生徒が一人もおらず、廊下にいる生徒を何人か捕まえて連れて来て無理に話を聞かせたほどの状態で、やはり人気がなかったのかもしれない。もっともガイダンス前に、各講師が書いた手引きを読んできているはずなので、そこで生徒をひきつけるようなものが書けなかったという点は反省すべきであろう。結局履修した2名は、ともにガイダンスに来なかった生徒だった。

前任者の話では、生徒の第1希望、第2希望をもとに人数調整が行われ、どんなに少なくても2名はおり、この人数なら開講されないということはない、心配はいらないとのことであったが、99年度には外国語ではないが、履修者がなく開講されない科目があった。

外国語の授業はできるだけ生徒の人数が少ないのが理想と一般にいわれているものの、2名の生徒が偶然同じ日に欠席して授業が成立しなかったことが一度あったことから、少なければよいというものでもないという気がする。生徒が少ないほど、緊張感や義務感が生まれて生徒全員が集中できる一方、そのときの履修生各人のやる気や理解度に振り回され（99年度の生徒は意欲的で、授業態度はおおむねよかったが）、進度の調整が難しくなるのは事実で、ある程度多いほうが突き放した感じで授業ができてむしろよいかもしれない。それに筆者としては、多くの生徒にロシア（語）に触れる機会を持ってもらいたいという気持ちもあり、加えて教科書や辞書の売れ行きも気になるところだが、このあたりは議論の余地がある。

#### <試験・成績評価>

立教高校では3年生の試験は1学期に1回期末、2学期に学年末試験があるのみで、これらの点数を重視するようにとの学校からの指示はあるものの、教師のまったく自由な裁量で成績を出している。

筆者は三好氏の方式を参考に、試験の素点に、一定以上出席したものには、試験の成績が振るわなかったものほど多く平常点を加えてかさ上げすることとしてきた。したがって

極端に成績が悪いのは、ほとんど出席しなかった生徒に限られる。制度上、追試を課すことがあるが、三好氏も筆者も成績をそれほど厳しくつけてこなかったので、98年度は対象者1名、99年度はゼロである。

99年度に筆者は、定期試験だけでなく、学習事項の確認をかねて、おおむね重要な文法項目ごとに小テストを行なってきた。

なお、筆者は98・99年度とも、II期の学年末試験では自筆ノートを持ち込み可とした。レベル的に、本当は丸暗記しておいてほしい事項ばかりなのだが、授業についていけず、半ば投げやりになっていた生徒もほとんどがきちんとノートを作ってきており、「勉強させる」という効果はそれなりにあると考えている。ノートを参照するだけで解けるやさしい基礎的な問題と、それなりにひねった、文法を理解していないと解けない問題を組み合わせ出している。ただし検討の余地はあろう。

#### <教材>

関係者には周知のとおり、高校生向けのロシア語教材というものはなく、大学の第二外国語用教材を使用することとなる。ただしアルファベットや発音の教材は別途準備したほうがよいかもしれない。

カセットテープがあるほうがよいが、教師も常日頃から発音には気をつけるべきである。カセットは操作がわずらわしいこともあるし、指導上教師が発音してみせるほうがよいこともある。初心者の前でなら、発音が少々悪くても平気だろうなどと思てはいけない。生徒の中には必ずといっていいほど耳の良い者がおり、テープと教師の発音がかけ離れていたりするとまずいので、油断は禁物である。

しばしば問題となるのが、筆記体を教えるかどうか、という問題である。筆者はこれまでのところブロック体というべきか、活字体を簡略化したような書体で書き、また書かせていたが、筆記体を教えたい、というのが正直なところである。ロシア人が実際に活字体のように書くことはほとんどないし、また教師としてわがままを言えば、板書のように速く書けずいらだつということもある。翌年度以降は習字張などを用いて筆記体を教えたいとも考えているが、活字体さえ見なれないキリル文字を筆記体まで覚えさせることが、前述のような限られた時間で可能であるか、という問題は残る。教えるとすれば宿題を出すのがよいだろう。ついでながら、ワープロなどが普及しているので、教師自身がきちんと筆記体を書けるかどうか、平素から留意しておくべきである（特に大文字や、Л, М, Яの書き始めの「ひねり」など）。英語の筆記体の癖など、意外と気づいていないものである。筆記体を用いなくとも、句読法や大文字の使い方もおろそかにしてはならない。

さて、これからは各学校にパソコンが常備されていくとのことで、立教でもすでに利用されているようであるが、ロシア語の授業でも活用できるようになるとよいかもしれない。具体的には、CD-ROMの学習教材があればその使用や、インターネットによる情報収集といったところが考えられるであろう（この点に関しては以前、中国語の先生からも提案があった）。

#### <発音指導>

文字に慣れさせながら発音も指導していく、というのが妥当な方法であろう。発音させるのはもちろん、教師が発音したものやテープで流したものを書き取らせるのもよいかもしれない。キリル文字はほぼ1字が1音を表しているのので、その点は指導しやすい。ローマ字と紛らわしい字を周知徹底させるのは言うまでもない。ある意味ではローマ字を使う他の言語よりは、英語式の発音に引きずられることがなくていいかもしれない。

次の段階として、つづりと発音が異なる場合に触れることになる。アクセントのないoの発音、また無声子音の有声化、有声子音の無声化といった現象は意外に習得しづらいもののようなのである。出てくるたびに丁寧に指導する必要があるが、そもそも、先に述べたとおり、教師が自らの発音に留意すべきである。留学するなどして美しい発音を身につけている教師も、おかしくない範囲で明瞭な発音を心がけるほうがよい。

#### <文法指導>

適宜英語と比較して説明するのも有益である。冠詞がないこと、格の概念、などなど。生徒たちが語形変化に辟易するのは無理もないが、英語と比べ、変化させたほうが文の意味がとおりやすい例などを挙げておくのもよい方法である。難しい項目と易しい項目を交互に説明していく方がメリハリがつく。例をあげれば、be動詞の現在形にあたるものは普通省略され、あってもひとつの形しかないこと、など。小手先のテクニックというわけではないが、緩急のリズムが肝要である。

現実には、文字をすべてきちんと覚えて発音できるようになっていない生徒がいても、授業を進行していかざるを得ないので、絶えず確認させる。辞書もしばしば引かせるようにし、該当する項を音読させたりする。

#### <その他>

高校生への指導は、大学生やカルチャーセンターなどの講習会の生徒に対するそれとは幾分勝手が違うようである（近頃は大学生も「子供」が多いとはいえ）。時には羨も必要で、

教員免許がある人はともかく、「大人」にしか教えた経験がないと戸惑うかもしれない。この点も小手先のテクニックなど必要ないが、平等に指名するなど、えこひいきしない配慮とか、時々冗談を言ったり雑談をする（なるべくロシアに関すること）などの工夫はしたほうがよい。また態度の悪い生徒への注意とか、居眠りしている者を起こす（筆者は全員起こして回ったわけではないが、容赦なく指名した）など、毅然とした態度で臨まなければならない（前任者の三好氏による）。友達感覚ではいけない。

以上、立教高校での経験を手短にまとめてみた。まだまだ至らない点が多く、ここに記したことは筆者の新たな発見というわけではなく、経験者の方の多くはすでに気づかれていることばかりかもしれないが、何かの参考になれば幸いである。